

# 三番茶を摘採しない茶園の夏秋期整せん枝技術

○西澤法聖・入江慎二<sup>1)</sup>

(熊本農研セ球磨・<sup>1)</sup>農林水産部農業技術課)

## 【目的】

リーフ茶需要の低下に伴う茶市場価格の低迷や、石油価格高騰による生産コスト増加のため、平坦地において三番茶を摘採しない茶園が増加している。

しかし、三番茶芽の整枝高さや整枝時期など処理方法によっては、翌年の一、二番茶収量が減収するなどの影響がある。そのため新たな夏秋期の整せん枝技術が必要である。そこで、三番茶を摘採しない茶園において浅刈り更新を組み合わせた夏秋期整せん枝体系を確立する。

## 【材料及び方法】

供試は場は熊本県農業研究センター茶業研究所内の‘やぶきた’（平成元年定植）を用いた。試験区の施肥量は年間窒素施用量60kg/10a、試験規模は27m<sup>2</sup>（畦長15m）である。試験区の構成は二番茶摘採後浅刈り更新を行い、再生芽の処理方法を変えた4区と通常の三番茶摘採する区を設けた（表1）。処理は2003年夏から行い、3年間同一試験区同一処理を行った。調査項目は一、二番茶の収量、20×20cm 枠摘みによる生育調査、近赤外分光光度計（S社製 RT-3）による品質調査を行った。

表1 試験区の構成

試験区	浅刈り深さ	初回整枝時期と位置	秋整枝位置
1区	-5 cm	8月上旬 ±0 cm	+4 cm
2区	〃	〃 +6 cm	-2 cm
3区	〃	〃 ±0 cm	+5 cm
4区	〃	〃 +8 cm	-3 cm
対照区	+2 cm (三番茶摘採)	-	+3 cm

## 【結果及び考察】

一番茶収量をみると、二番茶後に二番茶摘採位置から-5 cmの位置で浅刈り更新を行った後、初回整枝位置を浅刈り位置と同じ高さとし、秋整枝位置を初回整枝位置から5 cm 上げで行った3区が最も収量が多かった（図1）。

収量が増加した要因としては、20×20cm 枠摘み調査において、収量構成要素である摘芽長が他の区と比較して長く、百芽重が重いためと考えられる（表2）。

二番茶の収量、枠摘み調査においても同様の傾向であった。

また、近赤外分光光度計による生葉品質評価においては、処理区間に明確な差は見られなかった。

浅刈り更新時期は、アメダスデータを用い、日平

均気温を積算した温度（以下積算日度という）を指標とし、地域の平均気温が19℃を下回った10日後を秋整枝時期と推定して逆算することで、浅刈り更新時期の目安を求めることができる。時期としては浅刈り時期が7月上中旬、初回整枝が8月上中旬である。

ただし、この整せん枝体系や積算日度を使用できるのは三番茶が摘採できる地域が対象である。

また、本試験は同一試験区を連年で処理を行っており、試験期間において同様の結果を示したことから、毎年この整枝体系を行っても収量は安定して多収である。

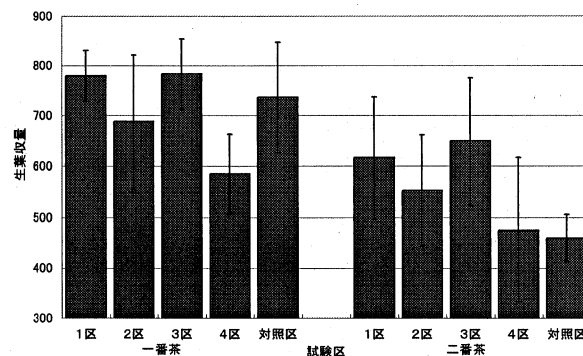


図1 各試験区の一番茶収量（3カ年平均）

表2 試験期間中の一番茶枠摘み調査（3カ年平均）

試験区	摘芽長 (cm)	摘葉数 (枚)	百芽重 (g)	芽数 (本/m <sup>2</sup> )
1区	4.5±0.2	2.9±0.1	38.3±1.4	2317±321
2区	4.0±0.1	2.7±0.2	34.6±2.0	2467±182
3区	5.1±0.8	3.0±0.3	40.8±4.1	2248±359
4区	3.8±0.6	2.7±0.2	34.1±2.8	2095±125
対照区	3.9±0.5	2.8±0.3	33.6±3.5	2994±624

※ 20×20cm枠摘み調査結果

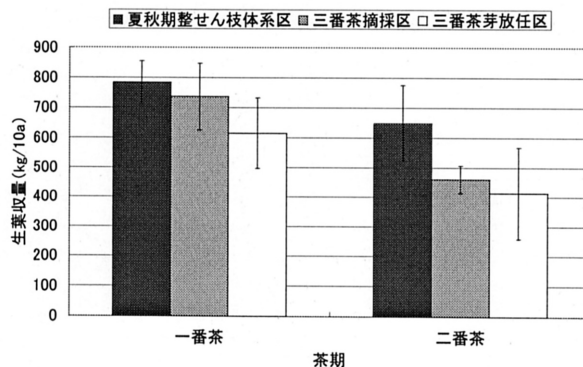


図2 夏秋期整せん枝技術体系と三番茶摘採、三番茶芽放任区との収量比較